

## 八郎湖再生の道／漁業振興に目を向けよ

谷口吉光（秋田県立大学）

2007年、八郎湖は湖沼水質保全特別措置法（湖沼法）の指定を受け、翌08年から秋田県の「八郎湖・湖沼水質保全計画（第1期）」がスタートした。それから4年、八郎湖の水質がよくなった時期もあったが、全体としては毎年アオコが異常発生するという事態は改善されていない。

このように行き詰まっている八郎湖の水質対策を今後どう進めたらいいのかを議論するために、去る6月2～3日、私が所属している環境社会学会の全国大会が大潟村のホテルサンルーラル大潟で開かれた。テーマは「住民主体の八郎湖再生に向けて」。全国の研究者と地元の関係者を合わせて約100名が参加した。

私はそこで「八郎湖再生の現状と課題」という基調報告を行い、次のように述べた。第一に、現在の八郎湖対策は水質改善に特化している（具体的には国が定めた湖沼の水質基準を達成することに目的を絞っている）が、実際には水質改善という課題は八郎湖の水界生態系の再生や八郎湖漁業の振興という問題と密接に関連しているので、これらを一体の対策として進める必要がある。

特に、八郎湖漁業の振興は重要だと思う。干拓前の八郎潟は「水1升到魚7合」と言われ、3000人の漁師が漁業を営んでいたが、現在はワカサギやシラウオを中心に約300名の漁師が漁業を行っている。

私が漁業再生に注目するのは、そこに住民の期待が集まっているからだ。一昨年行った八郎湖流域の住民アンケートで「あなたは、水がきれいになったら、将来の八郎湖がどうなればよいと思いますか」という質問をしたところ、最も回答が多かったのは「フナやワカサギやシジミなど八郎湖の在来魚が増える」（74.5%）、次が「安心して潟の魚が食べられるようになる」（65.7%）という回答だったのだ。つまり住民は魚やシジミなどの食の恵みを与えてくれる存在として八郎湖に今でも期待を寄せているのである。

また「子どもが泳いだり水遊びができるような浅瀬がある」（40.5%）や「八郎湖岸でキャンプなどが楽しめる施設がある」（37.4%）にも多くの回答が集まった。これは昔の八郎潟を知らない若い世代の希望だと言えるだろう。

八郎湖対策には「長期ビジョン」という長期目標が3つ掲げられている。「農業や漁業など湖にかかわる人々に持続的な恵みをもたらす」、「水遊びや遊漁など子どもから大人まで潤いに包まれる」、「鳥や魚や植物など多様な生き物が命を育む」という3つだが、いずれも住民が期待する八郎湖イメージと一致する。

県はこの長期ビジョンを「概ね20年後を目処に達成する」と言っている。それならこれまでの水質改善と平行して、漁業振興や岸辺の植生の復元なども八郎湖再生の新たな柱と位置づけ、具体的な対策を始めるべきではないだろうか。